



# 東近江プログラムオフィサー 活動紹介

# はじめに

地域には実現したい姿があります。  
より良い地域や暮らしをつくろうと奮闘する人たちがたくさんいます。  
でも、そんな人たちの想いをカタチにするための 必要な資金や場所、  
ノウハウなどのリソースが不足していたり、  
機会創出が起こらないことも多くあります。

プログラムオフィサー(PO)とは、  
いま地域が抱える複雑で多様な問題に対して、活動する人たちの想いとリソースをつなぎ、課題解決をサポートする専門家です。  
実現したい社会へ変化を促すプログラムオフィサーの存在が、  
ポストコロナの時代にこそ重要だと私たちは考えています。



# 東近江プログラムオフィサー 活動紹介

## 【CONTENTS／目次】

- ① 東近江三方よし基金について
- ② 東近江プログラムオフィサーとは
- ③ 取り組み事例 1
- ④ 取り組み事例 2
- ⑤ 東近江プログラムオフィサーの8つのフィロソフィー

# 東近江三方よし基金について

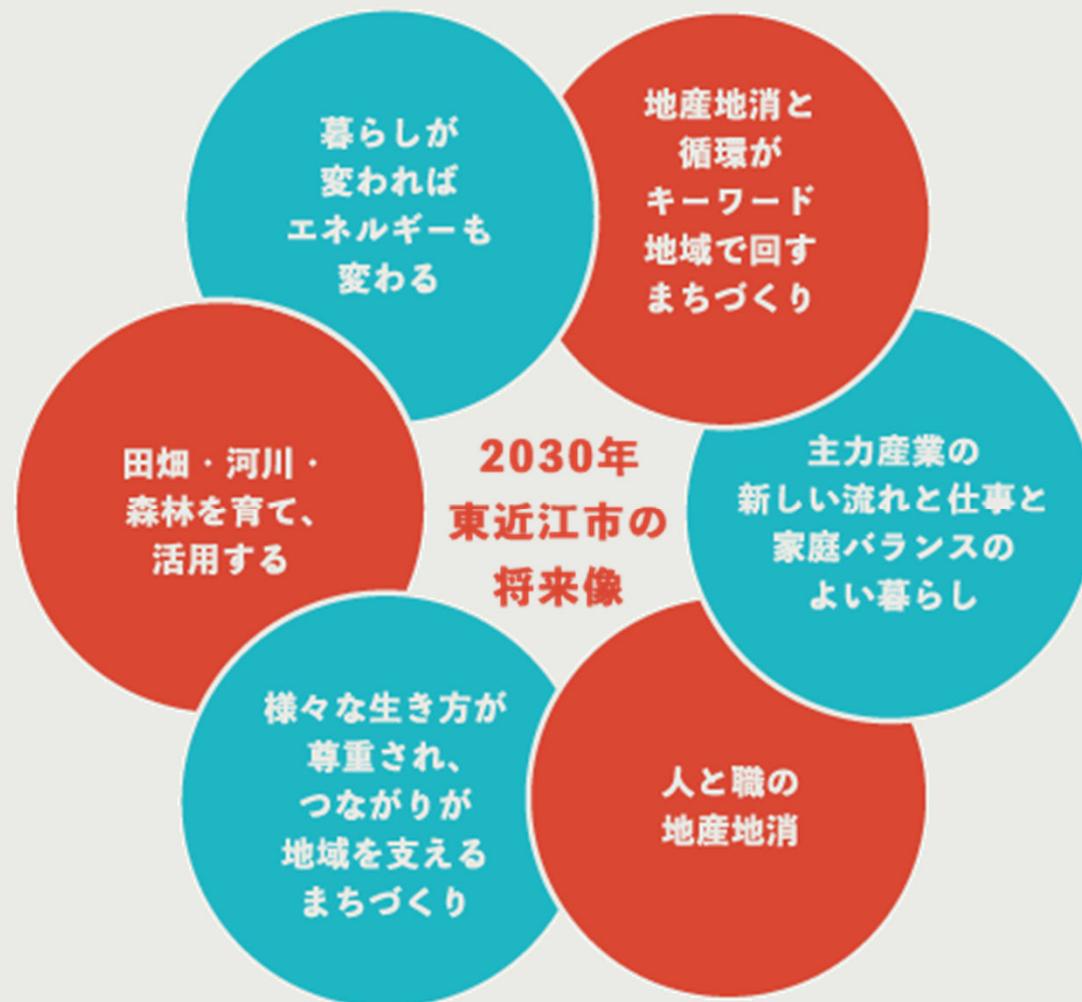
# 東近江三方よし基金について

「東近江三方よし基金」は、持続可能な東近江エリアの実現へ向けた公益活動を支援するコミュニティ財団です。

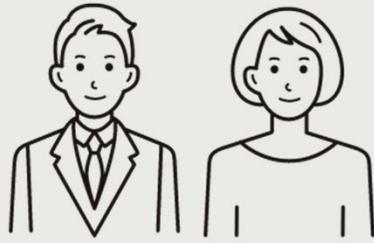


# 目的

地域資源を活かした地域課題解決を目指す  
主体・活動を市民が支える仕組みをつくり、  
循環共生型の社会づくりに資すること



# 活動内容



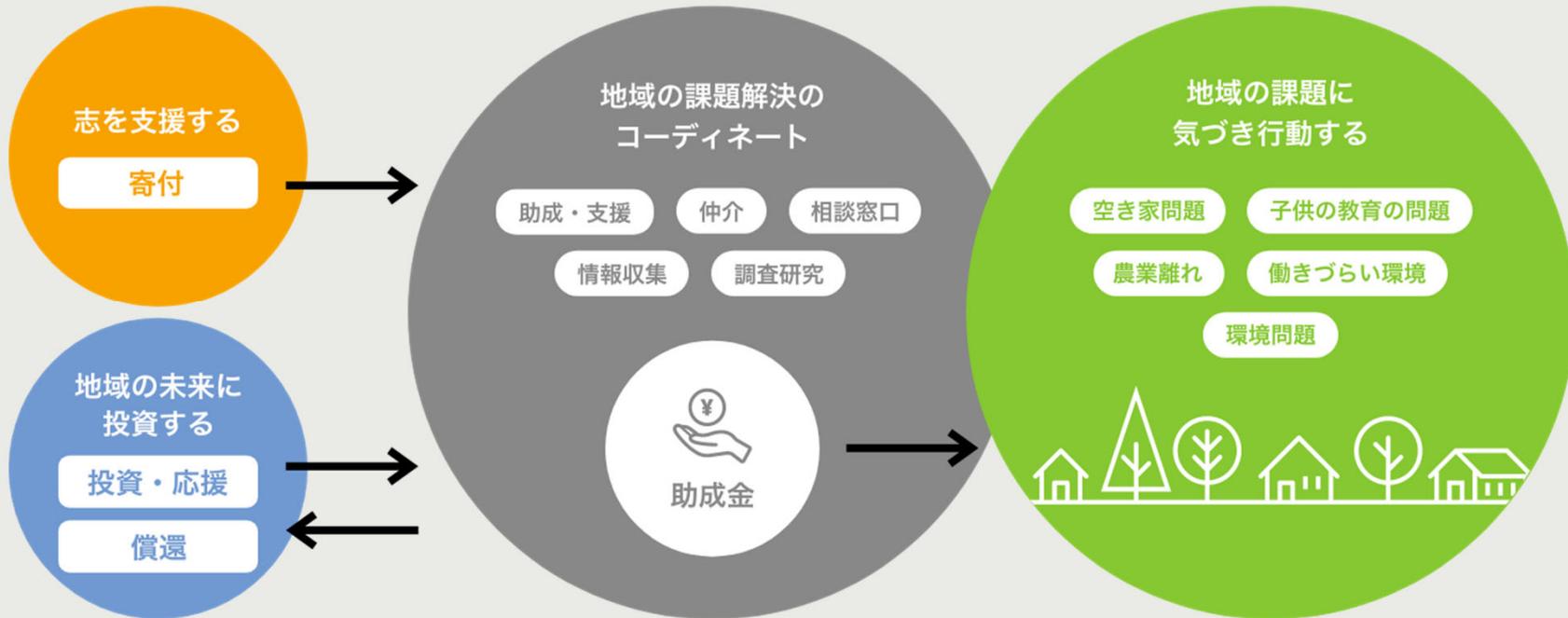
支援者（個人・企業）



東近江三方よし基金



社会的事業者



東近江プログラムオフィサーとは

(NPO法人)

多くの難病の方は、公的なサービスを受けられておらず、そんな方が相談し生きがいを見つけられるような場所がほしいです。

(一般社団法人)

子育て中の方をサポートしてきたが、もっと多世代が出会い、交流するきっかけを創出していきたい。

(任意団体)

一見わかりにくい障害を持つ子どもたちは、普通のスポーツクラブに行っても続かないんです。

(NPO法人)

多文化共生は、日本人が地域と一緒に住まう方々に興味を持つことから始めるべきなんじゃないかな。

(NPO法人)

移住してきた方々がどんどん心細くなっても集まれる場所がないんです。移住者もいきなり引っ越しはハードル高いし…。

(一般社団法人)

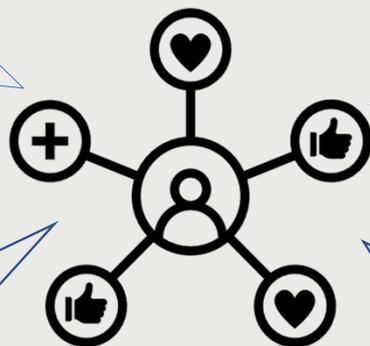
8050が現実味を帯びてきて、一人暮らしを経験したことが無い方や緊急避難が必要な方にとって「家」という器が必要。

(任意団体)

産前産後の女性をサポートする共同助産所をオープンしたが、次世代の助産師を育てる仕組みが不十分なんですよね。

(任意団体)

地域の交通弱者を救うために、みんなでバスを走らせたい。



## STEP 1

# 発掘

## 地域に入り、対話を通して課題と動機を見つける

東近江プログラムオフィサーの大きな特徴の1つは、地域に入り、数多くの現場でたくさんの人との対話を重ねることを通じて、地域の課題と取り組むべき動機や理由を見つけることです。

目の前の課題と地域の将来像を明確化した上で、どのような方法で解決できそうか、どんな人の手助けがあると良さそうかを考え、地域の関係性や助成金などのリソースを組み合わせながら案件の形成に取り組みます。



## STEP 2

# 企画

## 実現したい地域の未来を言語化し、必要なリソースをつないでいく

東近江プログラムオフィサーは、1つの課題を解決することや資金活用をゴールにしているのではなく、お金を通じて人と人、人と自然、人と課題をつなげながら、より良い解決策を探しています。

「もっと自分たちで地域を変えていきたい」という自走する気運が生まれ、未来につながる地域のエコシステムが実現することを目指しています。



## STEP 3

# 伴走

## 実行団体に合わせて必要な支援の形を考えながら伴走する

伴走支援の方法は実行団体の状況によって異なります。  
都度その団体に合わせてどのように伴走をするとよいか検討し、  
様々な方法を組み合わせながら支援していきます。

伴走の際に大事にしていることは、実行団体と設定した将来像を  
共有することです。

計画通りに遂行することよりも、何を実現したかったか、  
その将来像を見失っていないことのほうが大事だからです。



## STEP 4

# 内省

## 活動を振り返り、成果と新たな課題を見える化する

実行団体の活動をどのような視点で評価するか事前に検討しますが、その評価軸の設定も実行団体と共に考えます。

評価は「良い活動の見える化」を行うためにあるものだと考えています。評価軸を検討するときも、達成のしやすさではなく、「活動の目的や動機は何か」というところから話し合うようにしています。

それが、活動終了後に実行団体が評価を行う際に、新しい発見や課題への気づきにつながっていきます。



# 活動プロセス



取り組み事例 1

# 地域循環共生圏事業における 事例



## 小さな動機の発見！

子どもたちにビワマスを見せてあげたいけどそれには魚道が必要や…

森の横にある愛知川に子どもたちを連れて行ってあげたいんですよね…



<市役所の予算につながらない理由>

- ・そもそも一級河川は県管理
- ・出来るかどうか分からないものに予算はつけられない
- ・自力でやるには知恵も資金も足りない



## 動機のPoint！

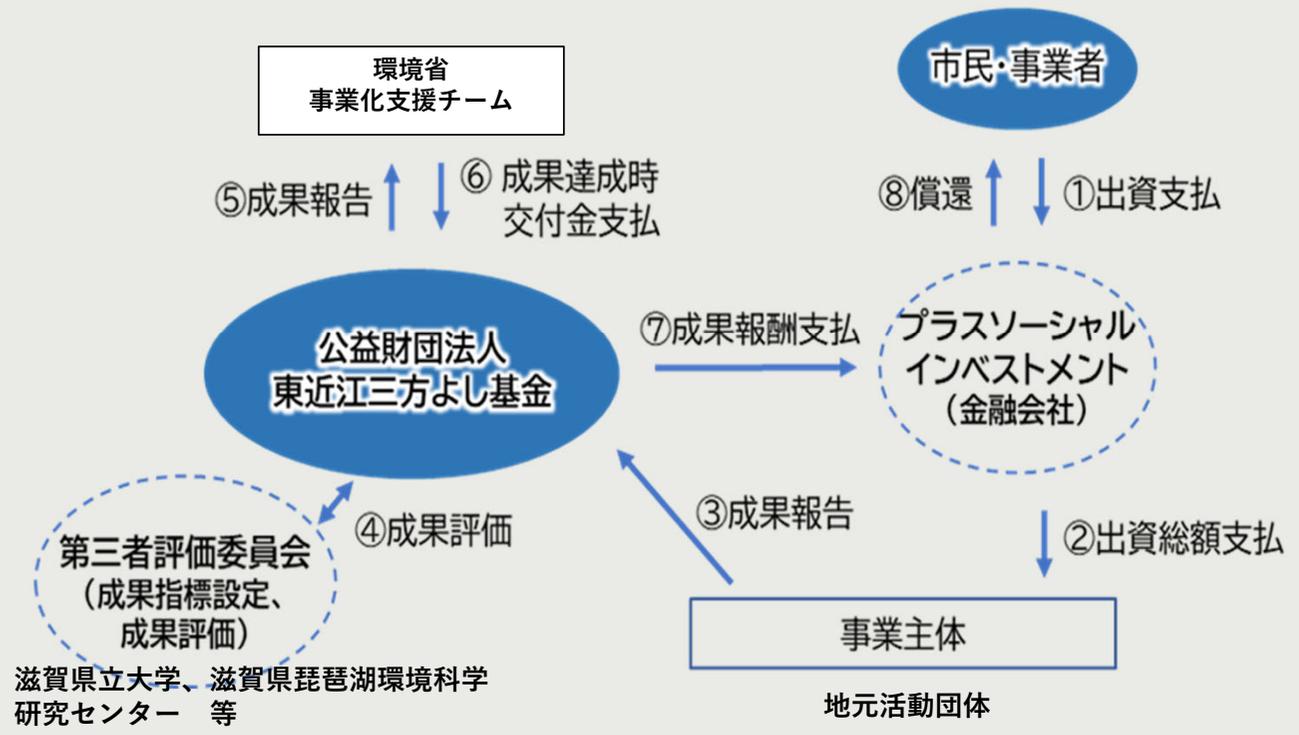
- ✓ 小さな自然再生のような市民で出来ることからやりたい
- ✓ 様々な専門家に知恵を借りて実現したい
- ✓ 「試す」ことから始めたい

# 事業化支援への提案（東近江市版SIB × 小さな自然再生）

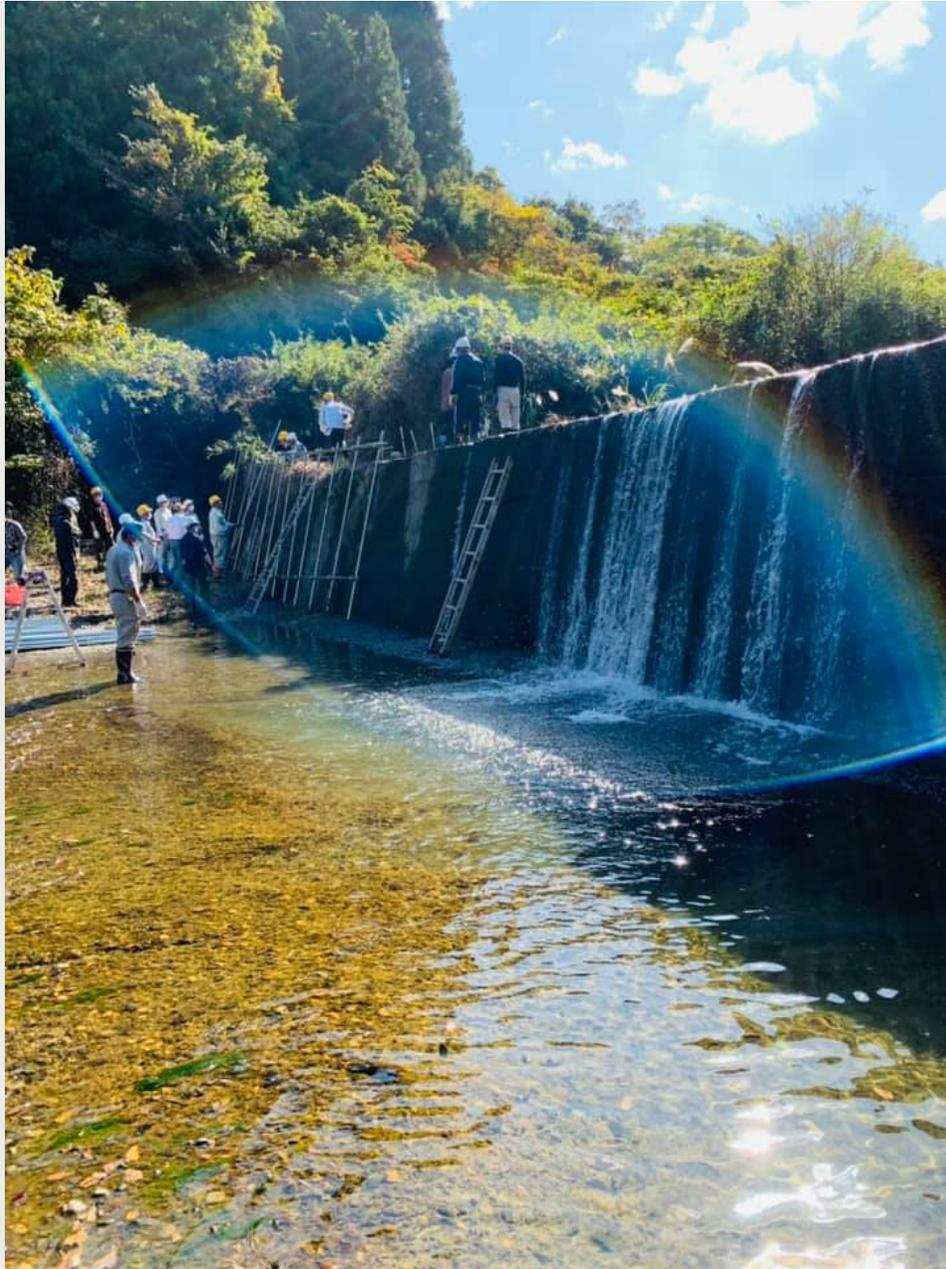


東近江市版SIBを活用した  
小さな自然再生と絶滅危惧種の川ガキの復活

人と自然・人と人のつながりの先に



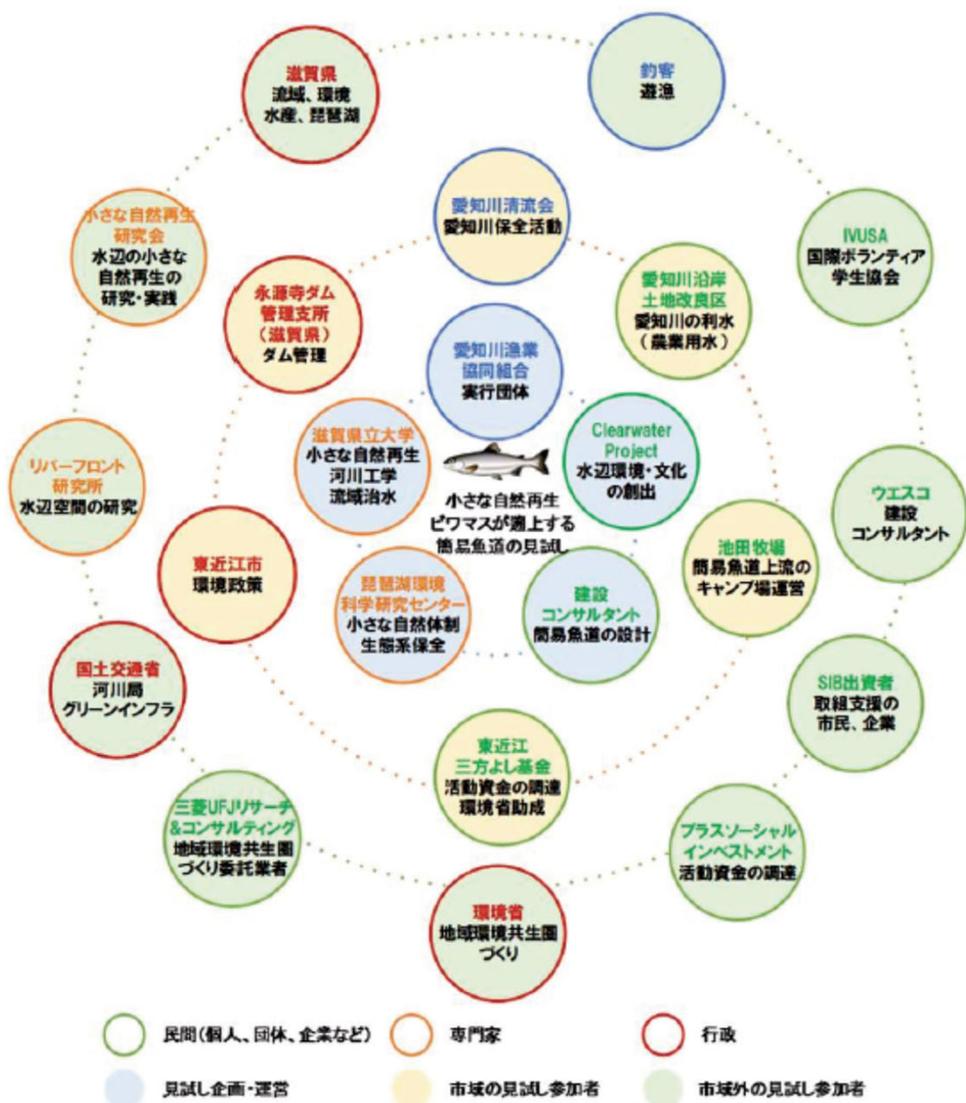




© Toshiaki Mizuno  
ピワマシ稚魚(全長約2.5cm)  
撮影日：2022/2/15  
撮影場所：愛知川支川洪川 水温：約4℃  
琵琶湖環境科学センター提供

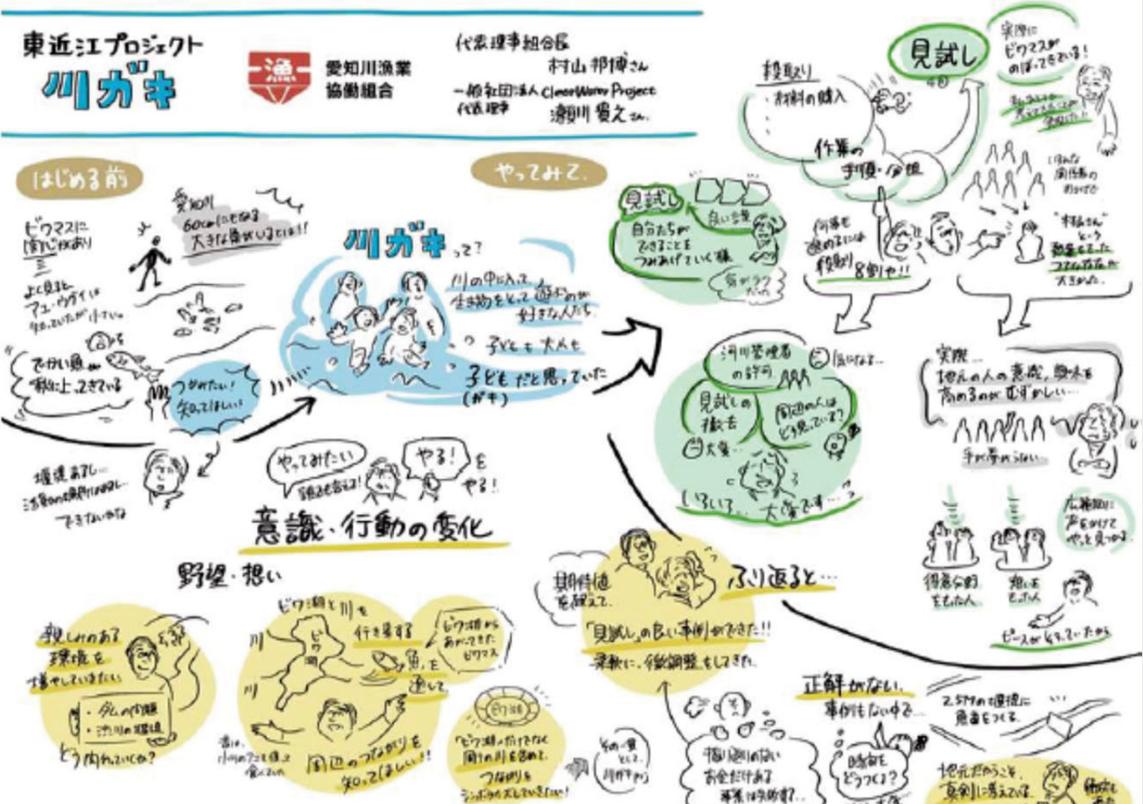


協働の川づくりの体制(パートナーシップの多様性)の見える化



● スタッフの変化(川に対する行動・意識の変化、目的関数の増加)

「親しみのある環境を増やしていきたい」、「琵琶湖と川を行き来する魚を通して、周辺のつながりを知ってほしい」などスタッフの川に対する行動・意識の変化が見られました。「琵琶湖だけでなく、周りの川を含めてつながりをシンボライズしていきたい」と、愛知川だけでなく琵琶湖に流入する川全体が対象となり目的関数の増加も確認できました。



1月30日 専門家がスタッフ2名にインタビューし、内容をグラフィックレコーディング。図左上:始める前の気持ち。図右上:取組を進めていく中での変化。図下:取組実施後の意識・行動の変化。

● 遊林会スタッフの変化(川に対する行動・意識の変化、目的関数の増加)

「川を見ると考えてしまう」、「川と森とのつながりの理解、勉強しないと!」、「いっしょに体験しからこそコミュニケーションが活発に」など、スタッフの川に対する行動・意識の変化が見られました。「森への関心が森里川湖に広がる」と、これまで活動してきた森だけでなく、森里川湖の自然全体が対象となり目的関数の増加も確認できました。



1月29日 専門家がスタッフ3名にインタビューし、内容をグラフィックレコーディング。図左上:始める前の気持ち。図右上:取組を進めていく中での変化。図下:取組実施後の意識・行動の変化。

## 親子いっしょに! そとイコ!

**『川ガキ育成塾』はじめます!**

「川ガキ」とは、時間が経つのを忘れ川で遊ぶ元気な子どもたちのことです。森里川湖をつなげる愛知川。その愛知川が育んだ自然いきものつながりを体験し、それぞれのフィールドのプロの解説で、川やいきものつながりやつきあい方を学ぶことができるエコツアーです。

**5/1** 親子と「みんなで水族館」をしよう!

9:30 ~ 15:30

【川ガキ育成塾】1回目  
※雨天予備日 5/7 (土)

川のプロ: 関 慎太郎さん  
写真家。京都水族館・元副館長。小学館の図鑑NEOシリーズや写真絵本などを多数発表されておられます。

定員	親子10組
料金	一人4,500円 (4歳以下無料)
場所	河辺いきもの森 (建部北町531)
持ち物	帽子、水筒 昼食、着替え 川に入れる靴
服装	長袖・長ズボン

**当日スケジュール**  
AM  
「小さな自然再生をしよう!」  
・愛知川に設置している「バープエ」の見学  
・河辺いきもの森で「バープエ」作り体験  
PM  
関さんと一緒に川のいきものを捕まえた後は、いきもの名前を調べて、みんなで水族館をつくりましょう!

**7/30** 元祖・川ガキと魚つかみしよう!

8:30 ~ 11:30

【川ガキ育成塾】2回目  
※雨天予備日 8/6 (土)

川のプロ: 黒川 薫さん  
物心ついた時から川に入っている黒川さんは元祖・川ガキ! 網でガサガサ掴みも釣り名人級です。

定員	親子6組
料金	一人3,500円 (4歳以下無料)
場所	東近江市和南川 (永源寺)
持ち物	帽子、水筒 着替え 川に入れる靴
服装	長袖・長ズボン

**当日スケジュール**  
8:30 あいさつ・諸注意  
9:00 頃 いきものつかみ  
10:00 頃 休憩  
10:20 頃 いきもの観察会 & 片付け  
11:15 頃 アンケート  
11:30 頃 終了予定  
※スケジュールは変動することがあります  
場所の詳細はお申込み後に改めてご連絡いたします。

## 取り組み事例 2

# 新型コロナウイルス対応 緊急支援助成における 4つの事例

# 一般社団法人 がもう夢工房

## 東近江ワンペアレントサポートプロジェクト

「一般社団法人がもう夢工房」は、コロナ禍で生活が困窮し食費を切り詰めるひとり親家庭等が今後600世帯になることを予想し、サポート事業を立ち上げました。



# 準学校法人 日本ラチーノ学院

## 多文化共生実現のための就学支援事業

東近江市で約200人のブラジルにルーツを持つ子どもたちが通う学校を運営する法人日本ラチーノ学院は、学校を「安心して学習できる居場所」とするためにコロナウイルス感染予防対策と、就学できない子どもたちを増やさない支援体制の整備に取り組みました。



# 特定非営利活動法人 まちづくりネット東近江

## 地域のあゆみを止めない支援拡充事業

コロナ禍でまちづくりのあゆみを止めないため、対面型からオンライン型の対話・交流・情報発信への転換を図ることが急務であると考え、5つの活動を通じて、したいことができ、会いたい人に会える新しいつながりづくりに取り組みました。



# 社会福祉法人 東近江市社会福祉協議会

## コロナ禍の課題解決を目指した地域福祉活動

コロナ禍で影響を受けている外国籍の方、生活困窮者、介護・障がい福祉従事者などの支援を行うため、以下の事業を実施しました。



コロナ禍で明らかになった  
「多文化共生」の課題

## STEP 1

# 共通の課題の発見

新型コロナウイルス対応緊急支援助成において、採択された「特定非営利活動法人まちづくりネット東近江」「社会福祉法人東近江市社会福祉協議会」「準学校法人日本ラチーノ学院」「一般社団法人がもう夢工房」の伴走支援を行うなかで、各団体のロジックモデルを確認すると、それぞれの活動内容は異なるものの、外国人支援が共通の課題意識を持っていることが見えてきました。

この4団体が目指すアウトカムの中に共通して「外国人支援・多文化共生」があるという発見から、4つの異なる団体がともに考えることで課題解決およびコレクティブインパクトにつながるのではと考えました。



## STEP 2

# 新たな共同体づくり

4団体がこれまで直接的なつながりがないこともわかり、「東近江三方よし基金」の呼びかけで4団体が集まり課題解決に向けた会議を開始。それぞれが直面している課題を共有しながら話し合いを重ねる中で、言葉の壁が大きく存在していることがわかりました。市役所の関連部署も交えた議論の必要性が明らかになり、さらに関係者を巻き込んで全員で協議を行いました。



## STEP 3

# 案件の企画・実践

外国人を取り巻く社会課題は深刻化する一方で、医療機関や公的機関における翻訳ツールが整備の不十分であることや文化の相互理解の不足、孤独や孤立も大きな問題として明らかになりました。

多様な価値感を尊重し、お互いに助け合える地域を創るため、

「まちづくりネット東近江」が主体となり、多文化共生のまちづくり事業が新たにはじまりました。

### 【主な事業内容】

- 医療従事者向け翻訳ツールの周知活動
- 多文化共生フェスタの開催
- 多文化共生サロンを開催し、異文化交流の機会・つながりづくり
- 多文化共生を根付かせるための事業検討



▲ 多文化共生フェスタの様子

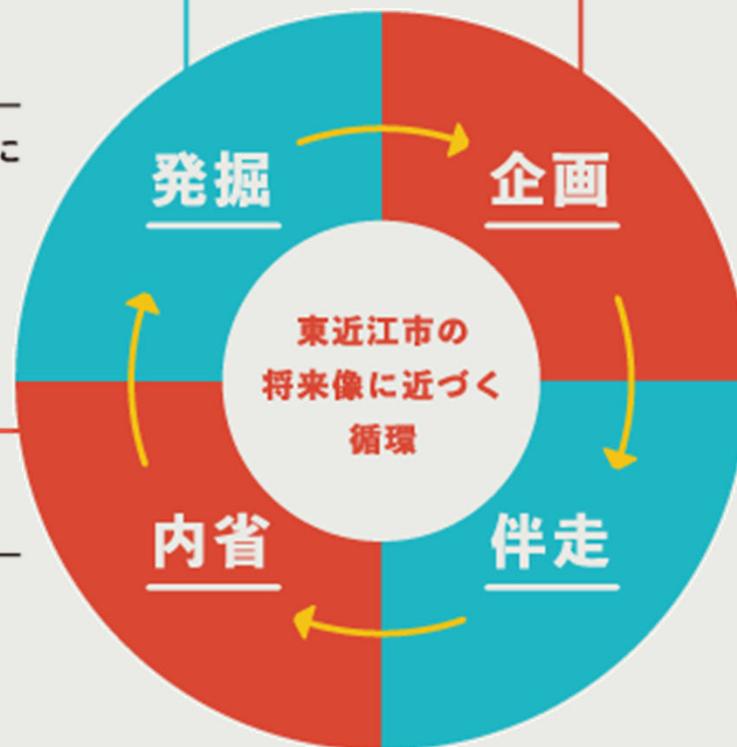
# 活動プロセス

## 2 新たな 共同体づくり

共通の課題認識を持つ団体に  
呼びかけ協議を開始

## 1 共通の 課題の発見

4 団体ともに外国人支援の  
課題認識を持つことを発見



## 3 案件の 企画・実践

議論で整理した課題を  
解決するための案件を  
企画、実践

# 東近江プログラムオフィサーの 8つのフィロソフィー

# 1 地域の活動者との丁寧な対話と理解から全てが始まる

地域に今どんな課題があり何をすべきかは、現場の活動者が一番見ているはずです。

だからこそ、地域の活動者と膝を突き合わせて丁寧に対話し、現場の声を聞くことが大切です。

そのプロセスがあるからこそ、何を解決したいのか、何を目指しているのかを明確に理解できるのです。

この理解がなければ、その人の思いに合った提案も伴走支援もできません。

地域の活動者との対話と理解から全てが始まります。



## 2 地域への想いや熱意を持ち続けることが活動支援の原動力となる

東近江市には、地域や誰かのために一生懸命に活動している人たちが本当にたくさんいます。

そのような方々の想いや熱意に触れると、なんとかして応援したいという気持ちが芽生え、それがPOの原動力になっています。助成金申請や伴走支援をする際には、私たちが第三者に対して代わりにプレゼンすることもよくあります。

PO自身が、その活動が地域にとって必要なことだと言語化できることはとても大事なことです。



### 3 常に課題とリソースの組み合わせを 考え続けること

地域の活動者から相談を受けたときに、誰の力を借りたら解決できるか、どんな資金があるとよいか考えながら話していると解決策が見つかったりします。

すぐに解決できなくても、いろんな人をつないだり相談したりするなかで道が見つかることもあります。

その地域内の人や課題、助成金など活用できるリソースが頭にあるとないとは大きな違いがありますし、それらをつなげていけるかは POの腕の見せどころです。



## 4 助成金ありきではなく 可能性から案件を作り出すこと

東近江POは 地域の活動者からの相談が来るのを待って、助成金申請を支援するやり方をしていません。

自ら地域の中に入り課題を理解し、解決できそうな人や仕組みなど新しい可能性を見つけることを大切にしています。地域の活動者が「助成金制度を活用してチャレンジしたい」となってはじめて助成金申請を支援します。助成金はいくまで手段であり、地域課題解決の可能性があるのでこそ、そこに案件が生まれるのです。



## 5 連携しながら地域課題を解決することで 地域力を高める

地域の課題やニーズが複雑化・多様化しているなかで、単独の事業や分野での課題解決が難しい状況が生まれています。だからこそ、世代や分野を超えた総力戦で地域課題に取り組むことが必要です。

そのような様々な視点から1つの課題を見ることが、結果的に総合的な地域課題の解決につながります。地域の総合力を高めることで、地域のエコシステム(生態系)を育て、誰も取り残さない地域を目指しています。



## 6 新しい担い手の発掘と支援の連続が 地域の未来をつくる

実行力がすでにある団体の支援は楽かもしれませんが。  
ただ、実績のある団体ばかり支援しては、地域の力  
としては先細りしてしまいます。  
長い時間軸で地域を考え、地域課題を解決する力を養い  
活動が継続されるには、大変であっても新しい担い手の  
発掘と支援も大切なことです。  
地域の課題に気づき、新たに行動を起こそうとする若い  
人たちも積極的に応援していくことが、地域の未来をつ  
くることだと信じています。



## 7 計画遵守より 何が大事なのかを重視すること

地域の活動者の事業が助成金に採択されると、いよいよ活動が始まります。POは助成金申請時の計画に沿って伴走支援を行いますが、想定していなかったことが発生したり、うまく進まなかったりすることもあります。そんなときは計画を遵守することだけに注視せず、本当に達成したい目的を重視します。必要であれば一緒に計画の見直しや軌道修正することも大事な支援です。



## 8 地域の小さな火が消えないよう 寄り添い続けること

地域課題の解決に向けたアクションは小さな気づきや、誰かの「なんとかなったらいいな」という思いから始まります。芽生えた思いや熱意の小さな火が消えてしまわないように、その人の思いに寄り添い、解決方法を一緒に模索することが大切です。

寄り添い続けていれば、そこにあった「なんとかなったらいいな」の思いが、「私がなんとかしなくては」とアクションに変わり事業としての形につながるのです。



# 活動プロセス

